

がんサロン主宰者が「患者が変われば医療が変わる 医療が変われば地域が変わる」をテーマにがんの問題を取り上げる。がんから学んだことを患者はもちろん、家族、医療・福祉関係者に対しても訴える。

2004年夏、地元益田市と大阪市の両方で連続して手術を受けることとなった。身体に初めてメスを入れるには相当

がんから学ぼう

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの関フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライブイングスケール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

「賢い患者・患者家族になろう」

の度胸がいる。それをちょっと躊躇したのがいけなかった。

1カ月の間に2度の手術。それも島根県益田市と500キロ離れた大阪市内で。痛い思いを2度。お金は3倍かかった。スタートから大きく躓いた。これが私のがんと最初の出会いだった。

それから10年たった今、まだ自分は生きています。そうだ生かされているのかもしれない。その間に妻を肺線がんで見取った。4年10カ月の闘病生活だった。

ならば自分が体験してきた「がん患者本人として」、「がん患者遺族として」のこの経験を少しでも皆さんに伝えることが出来ればと連載を始めた。

特に妻の闘病生活には学ぶところが多かった。それは自分が体験してきた経験がそうさせたのかもしれない。自分が支えられる側に立つと…。自分が支える側に立つと…。それぞれ見えてくるものが違う。地域格差のこと。手術のこと。抗がん剤のこと。セカンドオピニオンのこ

と。選択肢は多い。

2人に1人ががんにかかる時代。どの側に立ったとしても医療知識が必要な時代。医療の選択を求められる時代がやってきた。医療者に任せてばかりは居られない。自分のことは自分の事として正しい判断が求められる時代となってきた。

だから「賢い患者になろう。賢い患者家族になろう」を合言葉とした。そこで考えたことは、がんだけではなく様々なことで皆さんと会話を出来ないだろうか。

私は現役時代 採用、社員教育、システム作りに携わってきた経験から「創造性ゲーム」「価値観ゲーム」「虫食い川柳」などのゲームに精通している。だからがんに限らず、皆さんにあった答えを作り出して行きたい。「頭の体操」と言えるかもしれない。

さらに 皆さんからの思いに答えて見ようと考えている。どのような質問でもかまわないので「Q&Aコーナー」を織り交ぜていけたらと考えています。

2014年1月から2月にかけて、公民館5会場で開催した「人生を考えるワークショップ講座」。合計92名の参加があった。しかし参加者が多い公民館とそうでない公民館の差が出た。

「これからの人生をいかに生きるか、如何に閉じるか」

「終の棲家は何処なのか」などなど考えていかなければならない時代が来ているのか？」

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン 総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

家族の悲しみ超えて生きる力に

る。

本人が納得して旅たてば、家族は悲しみを超えて生きる力になる。そんな思いを乗せてこの講座を開いてみた。

参加者はとっも熱心に取り組んでくれた。やはり自分のこととして考えている方々だった。

若い方の参加もあった。支える側として取り組んで行きたいと言っておられた。

これまで生きてきた感想を書き、今後どう生きるかを考えていたのだが、みなさん何か楽しそうに書き込んでおられた。あまり考えたことがなかったのだろうか？

「人生の棚卸」その中から何かを学ぼう。お互いが…。

多少深く入り込んだ項目も入れた。余命の公表、延命治療について、など。しかしもっと支える側の参加がほしい。支える側の参加があれば、もっと展開は変わってくるのだが…。

今後「遺族の会、家族の会の設立」を

考えている。「在宅医療」は今後、「医療の本丸」と考えている。「在宅医療」が充実しないのは「支える側」に問題があるのだろうか。

万一何かあれば病院へ入れたい希望の家族、親せきが多い。しかし今後、病院にすんなり入れるのだろうか？

2025年を迎えると団塊の世代が後期高齢者となり、高齢人口は最高となり、満床で入院は無理になって来るだろう。ならば何処で生活するのだろうか？

在宅ならばそこで生活する力が必要だ。しかし現実には程遠い。

出来ている地域、出来ない地域、この格差はまことに大きい。それは支える側の連携、連帯力がいかほど有るかに掛かってくる。

もっと「支え力」をつけなければ、在宅医療は崩壊し、在宅難民があふれ、地域は崩壊の道をたどるだろう。そう言うてはいけない。

大阪・森の宮、成人病センターに入院していたときのことだった。手術を控え、全ての検査も一通り終わり、後は手術を待つばかりのある日、前にそびえる大阪城に行って見たくなった。何となくそんな気になった。

数年前に行ったことがあった所だからなのかもしれない。早朝6時、外出届を

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

病気に効く“気”に出会う

出して、散歩に出かけた。20分程度の道のり。上り坂がつづく。途中、沢山の地元の方々の散歩に出会った。なんだろう。興味深々。空は快晴。気分は最高。

天守閣前に大きな広場があり、いろいろな場所で凄い光景を目にすることになった。気(元気)を受ける場所。そのものだった。

あるコーナーでは盆踊り大会、またあるコーナーでは気孔、ラジオ体操、紙芝居など。レトロな歌声が、また阪神タイガースの応援歌も聞こえてくる。

知らない方々が集い、終わればそれぞれ別れて行く。早朝の朝。なんと凄いステージだろう。

感動を通り越して腰が抜ける思いだった。なんと素晴らしい光景だろう。1000名ほどの人数だった。

主催している方に聞いてみた。ボランティアの皆さんだ。こんなに沢山の方に迎えられると止められなくなる。期待されているのがわかる。実感として。

病院に戻って、医師とチースに伝えた。誰も知らなかった。薬よりも良く利くのではないだろうか。そんな気がした。

入院中、何度も足を運んだ。手術後も足を引きずりながらも行きたかった。不思議な場所だ。病気を治す凄い「気」があるのを確信した。そんな場所は全国津々浦々にあるだろう。

益田市に戻り、地域にそんな場所がないかを探してみた。住吉神社(360段)にも登って見た。やはり違う。「石見空港の滑走路」が思いついた。滑走路の先端、海よりの場所。ここは面白い。国道の先には日本海。夕方の便に乗れば美しい夕日が望めて最高の場所。

空港事務所に掛け合った。残念ながら断られた。やはり無理か。あとは何処も思いつかない。悔しい。

それから1年後、その場で滑走路を走る「空港マラソン」が開かれることになった。やっとそのような発想が出来る地域になってきた。

がんになって時間がいかに大切かを感じる。がん宣告は余命宣告でもあるからだ。がんサロンを始めたきっかけは患者同士、慰め合い、助け合い、医療情報を交換し、次に向けて治療をどうするかを参考になるからだ。

そんなことから始まったがんサロン。そこで出会ったのが皆さんの喜ぶ姿だ

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン 総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

患者の“意識改革”生む

った。白血病を抱える患者さん。ドナー探しもしたが見つからず、途方に暮れていた時、ひょっと立ち寄ったがんサロン。そこで起きた患者の変化は想像を絶するものだった。

泣き出していた患者が帰り際にはみんなを励ます。驚きの連続ががんサロンの幕開けだった。自分のことしか考えないで人生を過ごして来た自分にとって、新しい驚きだった。

残された時間を自分のためだけに使うのではなく、少しは他人のために使うべきではないかと思うようになった。時間が秒読みになって思いついたことだ。これは難しい。でも必要なこと。

少しの時間でもいい。これは「人のための時間だと思えるような時間」を作る。それが行動の中心となってきた。

がんサロンでは最初は学ぶことばかり。そのうちにいつの間にか新しい患者に教えている自分がいた。

自分の成長が感じられたとき、がんサ

ロンの開設の意味を垣間見た。「賢い患者像をめざして」のがんサロンのチームとしての力を感じた。これが患者としての「意識改革」だろう。

サロンに参加していただいている患者さんはほんの一握りの方。ほとんどの患者の皆さんは自宅で一人で悩んでいることでしょう。サロンに出てくるには勇気がいるようだ。自分の病気を人に言わねばならないからだ。

でも言ってしまうは物凄く楽な気持ちになる。病気を理解できるメンバーがそこにいるからだ。

そして学び励ましあい、明るくなり、「教わる」から「教える」に「変化」してゆく。

その意識は患者から医師、看護師に変化してゆく。これは凄い。市民のみんながこんな意識になれば、地域の医療は物凄く変わることだろう。そんな社会が来ればいいな。

大阪森ノ宮、大阪成人病センターに入院した時のことだった。どの患者も相当知識を持った患者と見受けられる。やはり自分で専門病院を選択して来られた患者なのだろう。

専門病院を選ぶというのは自分の病状をしつかりとわきまえていないと出来ないことだ。とにかく自分の状態をよく知

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン 総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

自分の病状知り、自分を知る場へ

った上での行動なのだろう。でも治療費以上にお金がかかる。家族の交通費、宿泊費など。付き添うことの大変さが現実にある。でもなんとかしたいと思う患者。家族の思いがこのような行動に繋がっている。

自分の住む街を見ると、そこに病院があるから来ている患者が多い。そして先生に治療を丸投げしている患者さん達。先生にもそれぞれ専門分野がある。全ての病気に対応はできない。

特に内科は範囲が広い。私でも糖尿病、血液内科、神経内科、循環器内科など様々な内科にお世話になっている。

さらに地方の病院は医師不足。なんでも屋にならざるを得ない。そこに大きな危険が生まれてくる。患者もそれなりの知識がないと自分の病状に対して、医師に質問すらできない。自分の命は自分で守らねば誰が守るのだろうか？

がんサロンを開設したのは患者が持っている不安を癒す場、情報を交換する場

として開設した。開設して9年目を迎えてがんサロンの機能も変化してきた。癒しの場から情報交換の場へ、そして自分の病状を知り、自分を知る場へ。

検査データを見て、数値が読める患者へと進化して、賢い患者を目指す心構えが出てきた。そうすれば先生にもっとし質問もできる。

毎年、石見高等看護学生3年生ががんサロンを見学に来る。「がん患者が望む看護師像」。こんなテーマで講義をしている。そのほか就職年齢なので社会の厳しさも教えている。幸い私は現役時代、採用・社員教育にも携わった経験から話が出る。教え、教わることが自分を進化させ、成長させる。若者たちから学ぶことも多い。

学生との最初の出会いは4年前にさかのぼるが今頃は中堅の看護師としてバリバリ仕事をしていることだろう。そうあってほしいものだ。